氏　　名	茂野　智大
学 位 の 種 類	博士（　文学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　　８８９９　　号
学位授与年月日	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	柿本人麻呂挽歌論―死なるものへの視点と方法―

主　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	谷口　孝介
副　　査	筑波大学　教　授	博士（人文科学）	清登　典子
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	小松　建男
副　　査	筑波大学　准教授	博士（学術）	吉森　佳奈子
副　　査	筑波大学　教　授	文学博士	伊藤　益

論　文　の　要　旨

本論文は、柿本人麻呂挽歌の特質を死なるものに対する視点と表現方法との関係から明らかにし、それを萬葉挽歌および人麻呂作歌中に定位することを企図するものである。その際有効な分析対象となるのが、叙述主体である話者「われ」が死別の事実を認識するに至る過程である。作中世界に対する「われ」の視点とそれに基づく認識を解明することで、作品が依って立つ死なるものの理解を導き出せると考えることで、人麻呂挽歌を萬葉挽歌や人麻呂作歌の中で相対的に位置づけることができると著者は提起している。全体は二部構成で、個々の人麻呂挽歌の読解を通してそれぞれの歌の方法的特質を明らかにしたうえで、その方法をより巨視的な観点で分析・整理し、相対的に位置づけている。

第一部は三つの人麻呂挽歌群を対象とした作品論から成る。いずれの考察においても、作品の構成分析によって叙述主体における死の認識過程を明かしつつ、表現考察によって死なるものに対する理解を明らかにする方法を採っている。第一章は「石中死人歌」（巻二・220～222）を考察対象とする。これは海岸に伏す無名の死人を詠う作品であり、人麻呂挽歌中最も死者と話者との関係性が希薄な作品で、生前の関係性に縛られない死そのものの理解を読み取ることが可能であると考える。ここでは作中の「われ」が無名の死者と同じ有限的存在として、国土や自然といった永続的存在と対比される構成をもつことを明らかにしている。生きている「われ」もまた本質的には可能性としての死を内在する存在と位置づけているとし、その構成は人間の死を、覆りようのない生の限界として理解することの上に成り立っていると指摘している。第二章・第三章は「泣血哀慟歌」（巻二・207～216）を考察対象とする。これは題詞で「妻死之後」に作られたとされる作品で、話者と死者との関係性という点で、「石中死人歌」の対極に位置する。本作品はいわゆる第一歌群と、第二歌群とその異伝である或本歌群とから成り、第一歌群と第二歌群・或本歌群とは死の受容過程において相補的な内容をもつとする。第二章で扱う第一歌群で特に注目するのが、長歌結句の「袖そ振りつる」である。折口信夫以来、

これを招魂のための呪的所作と解することが定説とされてきたが、著者は当該歌の構成分析および上代文献に見える袖振り・領巾振りの検討を通してその誤りを指摘している。そして、第一歌群長歌は結句に至るまで生者としての「妹」を求める行動に貫かれていること、第一歌群全体としては客観的事実に抗いながらも死の認識や別れの理解へと至る過程を詠っていることを明らかにする。第三章では第二歌群について、冒頭に話者自ら「妹」を過去の人と捉えた表現があるにも関わらず、なお「妹」を求める行動を起こすという展開の意味を考察している。そして第一歌群同様に第二歌群も、「われ」の主観的状況と客観的状況との乖離が「われ」の行動をもたらして作品を展開させる動力となり、別れに抗う「われ」の主観が眼前の状況に即して改まってゆく構成をもつことを指摘している。その構成によって死別が覆しようのないものであることが明確に理解されていたことを指摘している。第四章は「明日香皇女挽歌」（巻二・196～198）を考察対象とする。これはいわゆる「殯宮挽歌」の一つであり、題詞からも歌の内容からも公的性格が認められるとする。作中における「われ」の立ち位置や各描写の行為主体も議論されてきた作品であるが、著者はその点も再検討し、死なるものを誰がいかなる事態から認識していくか、明らかにしている。「泣血哀慟歌」は「われ」自身の行動と認識とを通して死別が示されているが、本作品でも第三者の行動を通して死別が示されており、こうした作中人物の実を結ばない行動を詠うことが、人麻呂挽歌における方法的特徴であることを指摘している。

第二部では、第一部の作品分析を踏まえ、人麻呂挽歌の方法的特質を相対的に位置づけるための三つの観点を提示している。第一章は萬葉挽歌中の死別表現語彙について論ずる。それらは従来、「死ぬ」の語を避けて用いられた婉曲表現ないし敬避表現といった理解がなされてきた。しかし著者は死者を動作主とした用言を分析し、「隠る」等の不可視化によって死別を表す語と「伏す」等の遺体描写によって死別を表す語とが共起しないこと、それ故これらの死別表現は単なる「死ぬ」の言い換えではなく、その語の本来的意味を活かして用いられていることを指摘している。いっぽう集中の「死ぬ」の用法を分析し、これがそもそも挽歌的なるものにそぐわない語であったこと、したがって挽歌においては避ける以前に選択肢に上る性格の語ではなかったことも指摘している。第二章は人麻呂作歌における「われ」の方法的特徴を論ずる。従来それは、身﨑壽氏の一連の論考により人麻呂の作歌活動における方法的展開と捉えられてきた。著者はまず語としての「我」の現れ方に着目し、人麻呂作歌が「我＋体言」のみの作品と「我＋用言（動詞）」を含む作品とに大別できること、その二類型が各作品における第三者情動の直接描写の有無に相関することを指摘している。その相関は、「われ」のあり様と作品展開の方法とが有意に結び付いていること、さらに第三者情動の直接描写がない作品は、想像や推量としてはそれをもつ作品とそれをもたない作品とに分けられ、各々異なる主題をもちつつも題材自体の公私（歌中の経験が想定される享受者と共有されているか否か）等に、分類内における統一性が認められることを指摘している。以上の点を踏まえ、人麻呂作歌の「われ」の方法的差異は作歌活動の軌跡に還元すべきものではなく、題材や発表形態に応じた方法選択の結果と見るべきこと、挽歌においてはそれが死なるものを捉える視点に直接し、各作品の表現・構成を方向づけていることを明らかにしている。第三章は上代文献に見える死生観を論ずる。まず『萬葉集』中の挽歌とその他の歌とに共通する表現を分析し、死別と生別とは別れていく過程を表現する語を共有しつつ、その結果の継続性において差異をもち、そこに死なるものの理解の特徴が現れていることを指摘している。次に記紀神話や萬葉挽歌を対象に死別の認識過程を考察し、そこにおける視覚の重要性を指摘している。第四章では人麻呂関係歌の表記について、漢字表記とそれが指示する和語との意味領域の差から、その方法的特質を論ずる。表記が和語の意味領域を限定／拡張する表現手法の特徴を論じ、表記によるこうした表現手法が人麻呂関係歌にあっては、表記による表現の可能性に対して自覚的な営為に基づくものであると判断できると指摘している。終章では以上の行論を踏まえ、人麻呂挽歌の特質およびその周辺の問題について総括的に論じ、結論とする。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文の成果は次の三点に要約しうると考えられる。

第一としては、第一部の四つの章において、三群の柿本人麻呂挽歌について一貫した視点から、構成的に死なるものの認識を浮かび上がらせた点である。取り上げられた人麻呂挽歌はいずれもすでに議論し尽されたかに思える作品であるが、それらに対して、死なるものへの認識の過程を詠み込む作品であるとする新鮮な読解を提示することで、従来の解釈を一新することができたと考える。その方法はあくまで表現にこだわり、表現外の事項を持ち込んだ解釈を排除するという、文学研究の王道とも言うべきもので、その方法を貫くことによって、まったく新しい解釈を提示しえていることは、今後の文学研究の範となるものと言える。

第二の成果としては、第一部第二章、第二部第一章に顕著な、定説への疑義から新説の提起を行っている点である。呪的行為としての袖振りという誰もが疑わなかった事象や、死の婉曲表現として「隠る」などの語が使用されているといった「常識」に対して、妻に対する呼びかけであり、またじっさいに姿が見えなくなることであるなどと、死なるものへの認識過程の表出という著者の一貫した立場から、みごとにそれぞれの事象を説明し切っているのである。これらの新説の提起はそれだけで学界における重要事ではあるが、本論文においてはたんに一つの新説の提起に終始するだけではなく、歌表現の細部に対する論証が論文全体の趣旨を下支えする確実な要素として布置されているのである。もって著者の洞察力のみごとさに驚嘆を禁じ得ないところでもある。

第三の成果としては、第一の成果から導かれることとして、古代における死なるものへの認識の様相を浮かび上がらせたことである。古代における死とは何かという難問への答えの階梯として、人麻呂挽歌を題材として、死の認識のメカニズムを具体的に提示することができている。挽歌における死の認識を見えなくなることと捉え返すことで、今後の古代死生観の議論にきわめて有効な視座を提示することができたと考えられる。本論文が文学論として最終的に完結するのではなく、副題に提示されている「死なるものへの視点と方法」という大きな構想の序論であることを意味するものである。

総じて本論文の特色は、ケレンミなく着実に表現考察を積み重ねることで新生面を切り開くところにあるが、その過程において強靭な構想力による論旨の一貫性と確かな論述の力とを背景としてもっていることも特筆すべきことである。

このように隈なく思考を巡らせた重厚な論文ではあるが、柿本人麻呂挽歌という限定された題材のなかでの思考であることが、ここで論じられた内容の普遍性をどう担保しているか、なお見通せない点を含んでいる。しかしこのことは逆に著者の研究の進展を予測させるものでもあり、本論文の瑕疵とまでは言えない。ここで展開された議論が今後当該学界に広く寄与しうるものであることは確実と考えられる。

2　最終試験

平成　31 年 1 月　25 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。